東下地遺跡（ひがししもじ）

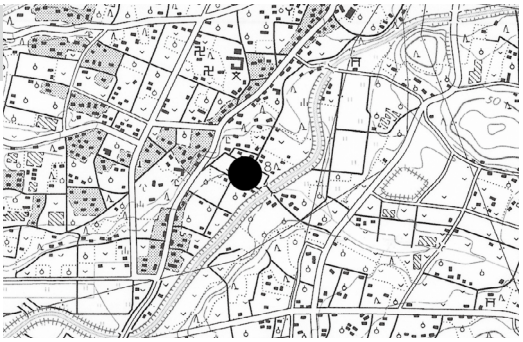
所　在　地　豊橋市石巻本町東下地ほか
（北緯34度47分52秒 東経137度26分16秒）

調査理由　道路改良工事（主）東三河環状線

調査期間　平成23年５月～平成24年３月

調査面積　10,630㎡

担　当　者　永井宏幸・川添和暁



調査地点（1/2.5万「豊橋」）

調査の経過　発掘調査は、主要地方道東三河環状線道路改良事業にかかわる事前調査で、愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。調査期間は平成23年5月から平成24年3月、調査面積は10,630㎡である。

立地と環境　東下地遺跡は神田川右岸と豊川左岸の河岸段丘に挟まれた低地に立地する。標高は17m前後である。周辺は遺跡が連綿と続く。なかでも東下地遺跡の西側に隣接する河岸段丘上は古墳群を含む弥生時代後期から古代・中世の高井遺跡が注目できる。

調査の概要　調査は、現況の道路を区切りにＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ区とし、実施した。以下、Ａ区とＢ区の調査概要を中心に示す。

Ａ区　中世から近世を中心とする遺構群が調査区全体にひろがり、古代以前と考えられる水田跡が調査区北西側を中心に展開する。

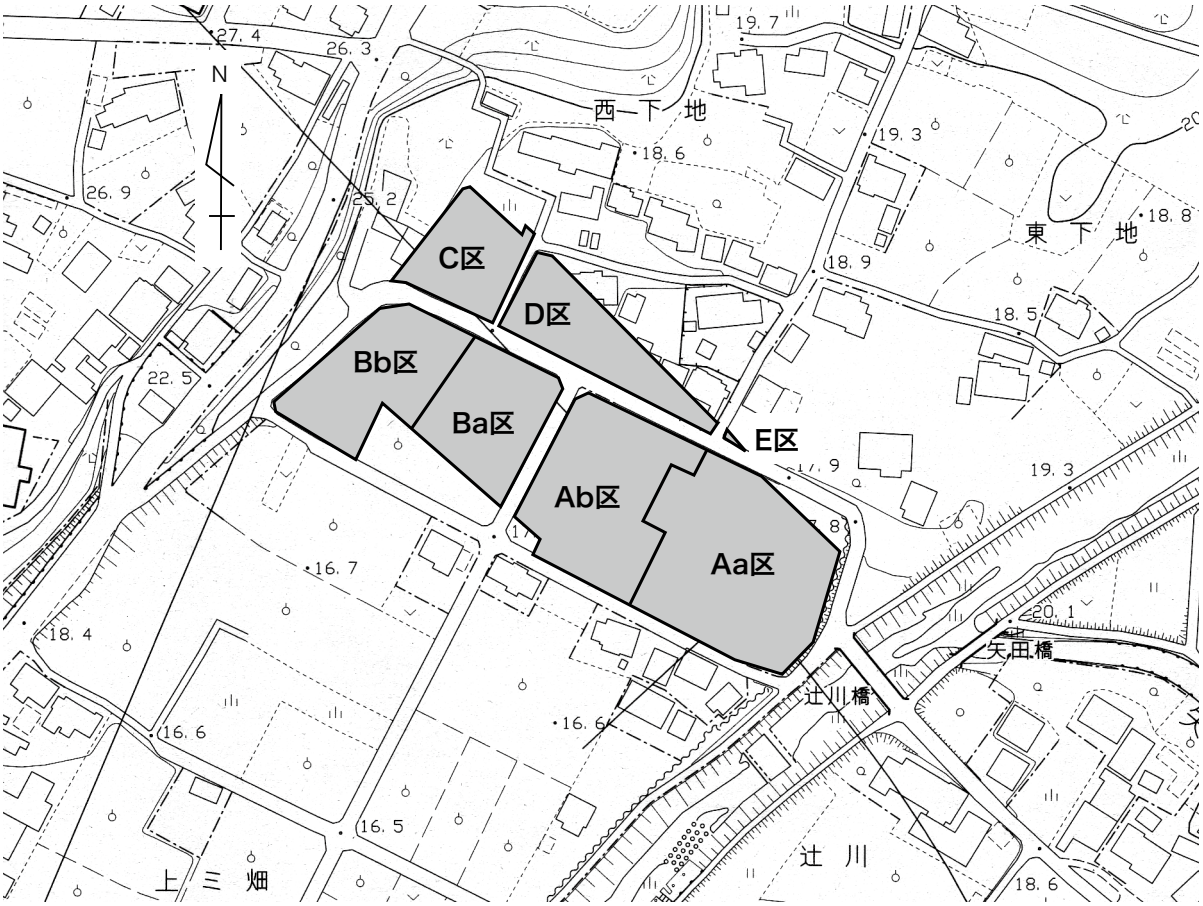


図１　東下地遺跡 調査区配置図（1:2,500）

写真１　下面の水田跡

写真２　副葬品のある墓壙

写真３　柱穴群全体

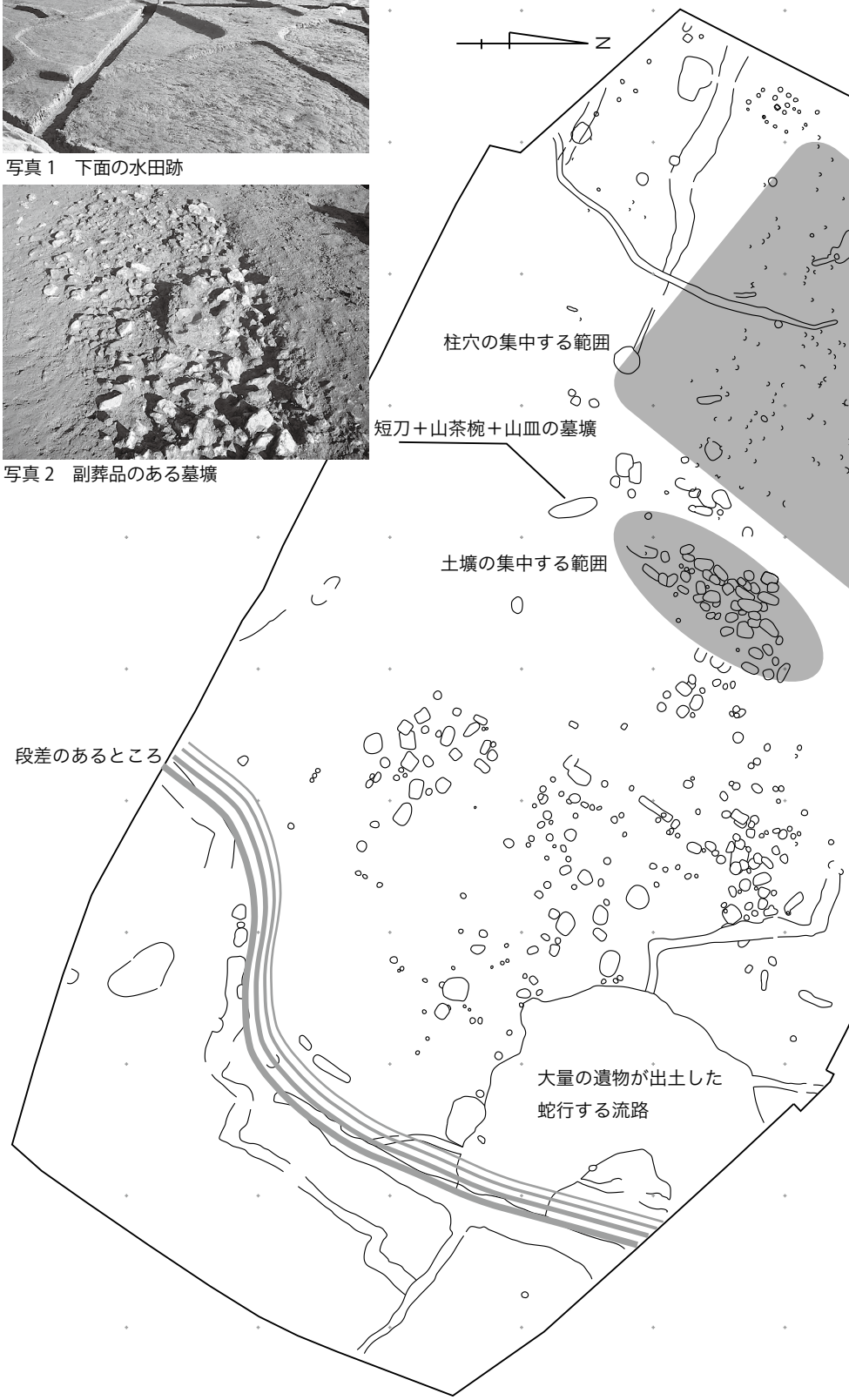


写真４　集石のある土壙

写真５　流路遺物出土状態

図2　A区遺構全体図（1:500）

水田の調査　古代以前の水田跡は、Ａ区の北西隅を中心に確認した。調査区全体に水田跡の確認できなかった理由としては、古代以降の砂礫層をともなった洪水性の堆積による削平がある。したがって、砂層と細礫層によって削平されずに覆われたところが偶然残存したと想定できる。時期比定が確定できない理由としては、Bb区で検出した畦畔から出土した土器が古墳時代と想定できる以外に、時期比定できる遺物がないからだ。堆積状況と畦畔の配置などから同時期である可能性もある。ただし、幾重にも重なる砂礫層が層順の根拠を混乱させているので、砂層と細礫層によって覆われた箇所を比較するだけでは確定できない。

畦畔の配置は、不定形で一面あたりの面積も３～８㎡で、小区画水田に相当する。畦畔が弧線を描くように緩やかに曲がるありかたが、地形を活かした配置になっている。

中世墓の調査　Ab区東寄りに幅5m、長さ10mの範囲に密集した集石を伴う土壙群がある。

当初は周辺の大礫層がシルト層の厚く堆積する上位に散在していると認識した。ところがこの土壙群の南端、すこし離れたところから不定形に広がる集石を検出した。大礫を除去すると短刀・山茶椀・山皿が重なって出土した。人骨は確認できなかったが、3.4×1.1mの礫敷土壙の上位に、1.5×0.5mの長楕円にシルト層があった。短刀などもこの堆積層から出土していることから、棺を想定したい。

この大型土壙検出をきっかけに、拳大くらいの礫が集積した箇所を精査したところ、25基の土壙を確認した。さらに隣接する箇所に、礫のない土壙も多数あり、都合40基以上の墓壙群となった。

柱穴群の調査　中世墓壙群の西側は細礫に覆われた小土坑を200箇所前後検出した。大きさは径20㎝前後、深さ50㎝ある比較的しっかりとした掘りかたの柱穴が多い。柱痕のあるものも含み、なかには柱の残欠と礎板を確認した柱穴もあった。

中世の河川跡　Ａａ区北東寄りに幅10m前後の蛇行する流路を確認した。検出時は土師器片などがほかの場所に比べて多い程度の認識であった。流路の深度を確かめるためトレンチを数カ所入れると、おもに流路西寄りから13世紀代を中心とする完形品の山茶椀をはじめ遺物の集中する所があった。さらに掘削を進めると、数カ所に大量の遺物投棄があった。なかでも入り江状になった所は大礫が敷かれたように集中し、そこに隣接して山茶椀・桃の種子などがまとまって出土した。

流路の堆積は下位に砂礫層がひろがる。その上位にシルト層が堆積し、とくに流路の岸辺を中心に遺物が出土した。土師器皿が相当量あり、山茶椀より多い。椀皿類を中心に、完形品が多く、使用頻度の高くないものが多い。墨書土器は数点出土している。猿投・瀬戸窯製品の椀・皿類が少量ある。

中世末から近世の溝群　神田川に近いＡａ区東寄りは川の本流部分である。表土近くから中・大礫を中心とした礫層が厚く堆積する。この礫層が途切れる付近に１m前後の段差がある。この段差を利用した縁辺に、溝群がある。とくに下段の溝は幅５m前後ある大溝であった。遺物は15世紀代の土師器鍋がまとまっている所を除くとあまりない。

そのほか、Ａａ区で検出した400基近い土坑などは、ほとんど遺物を含まない浅い掘り込みの遺構であった。土色と土質の明確な差異はない。したがって、人工的な掘り込みではない遺構も相当数ある。そのなかでも土師器皿が20枚程度完形品で出土した土坑、水晶の数珠玉と人骨が出土した土坑はＡｂ区の中世墓群との関連性が指摘できる。（永井宏幸）

Ｂ区　Ｂ区・Ｃ区は、遺跡西端の段丘下に設定した調査区である。西接する段丘はやや舌状に張

り出す形状を呈しており、Bb区中央部付近で最も張り出している。B区は対象面積が広いため、遺跡東側のBa区と西側のBb区に分けて調査を行った。

Ba区　Ba区の層序は、上から、Ⅰ層：表土（20～30cm）、Ⅱ層：黒褐色シルト（20～30cm）、Ⅲ層：砂礫層（最大70cm）、Ⅳ層：灰黄褐色シルト（約30cm）、Ⅴ層：にぶい黄褐色シルト（5～10cm）、Ⅵ層：黄褐色シルトである。Ⅱ層は、調査区全面に広がりが確認できる。やや斑土状を呈する土壌で、ごくわずかに戦国期あるいは近世の陶器片が出土した。畑地など中近世の耕作土であったと考えられる。Ⅲ層は、調査区西側で特に厚い堆積を確認できたもので、西側に展開するにつれて層厚が著しく薄くなる。Ⅳ層は、後述するBb区の成果から、古墳時代の水田耕作土と考えられるが、この調査区では認識が至らず検出し得なかった。Ⅴ層はⅥ層（地山層）への漸位層の様相を呈する層である。この層で、本来ならばⅣ層に存在した水田畦畔の擬似畦畔と、弥生時代前期の土器群の出土をみた。擬似畦畔は5×5m以下の小区画である。弥生時代前期の土器片は自然地形の凹地あるいは自然流路内に土器片が散在している状態で見つかった。ヒトの活動痕跡かも知れないが、活動内容は不明である。

Bb区　Bb区の基本層序はBa区と同様であるが、段丘縁の西側区域とBa区から連続する東側区域とで、様相が大いに異なる。西側区域では、南北に走る大きな自然流路が見つかり、流路内のⅡ層相当層で、小規模な水田を検出した。また、Ⅲ層下の中洲状の低位の高まりでは、地山直上で水田耕作土と考えられる均質なシルト層を確認した。これは後述するC区の水田畦畔に対応するものと考えられる。一方、東側区域では、Ⅳ層上面で、極めて良好な状態で小区画水田を検出することができた。Ⅲ層の堆積が、水田畦畔をパックしていたためと考えられる。水田は配置・構成の異なる２面の水田（上面・下面）を確認できた。上面の水田は３×３m程度の小区画で東側区域全面にわたって見つかった。畦畔内の耕作土からは古墳時代前期から中期にかけての土器片がまとまって出土した。一方、下面の水田は、自然流路際に展開しており、溝・大畦畔・導水路・小区画水田をセットで確認することができた。また、下面水田脇のⅥ層直上では、土坑状の落ち込みと∩形を呈する溝が１セットとなった炉跡が３セット以上重複した状態で見つかった。　（川添和暁）

写真6　東下地遺跡　調査区遠景

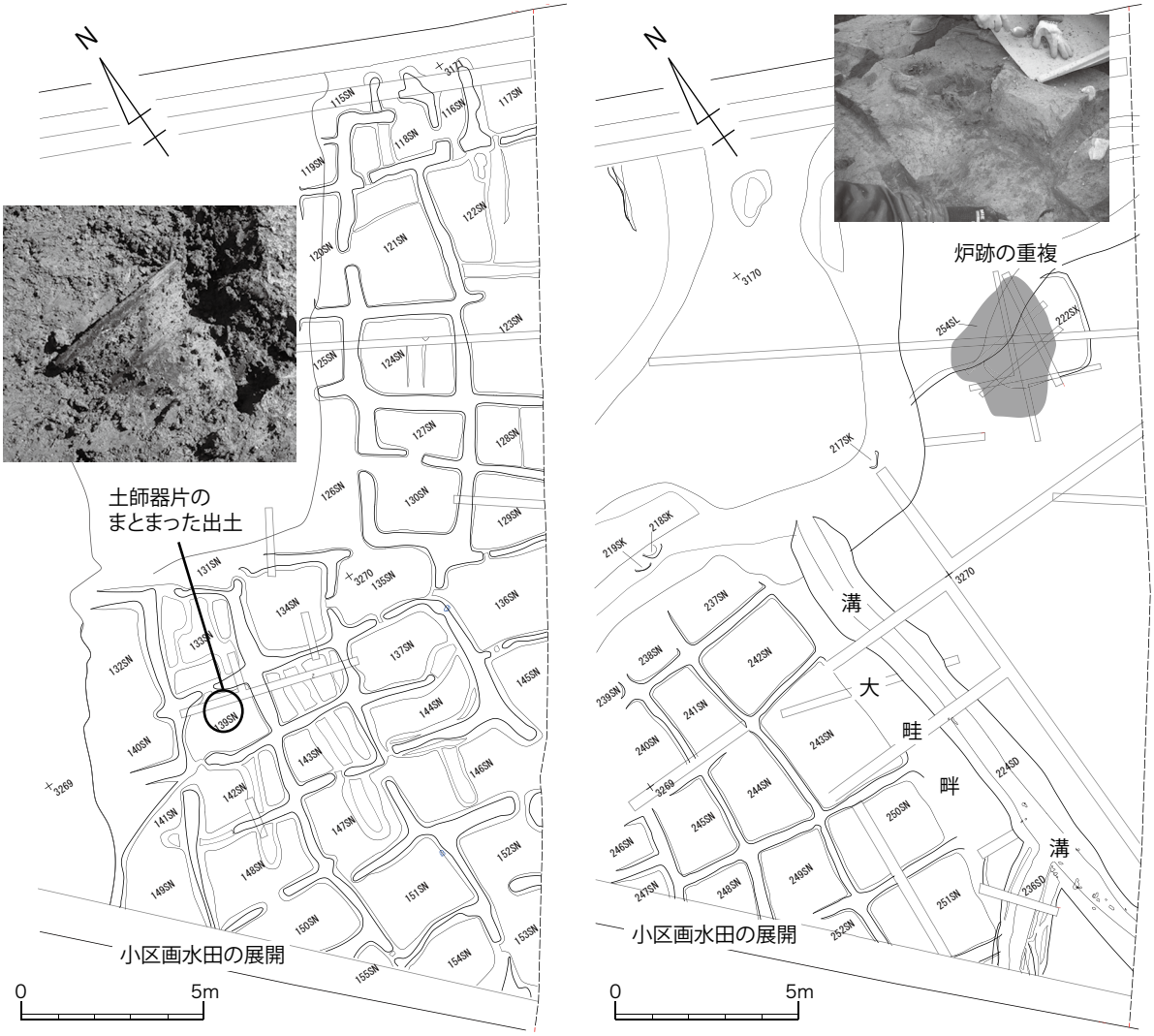
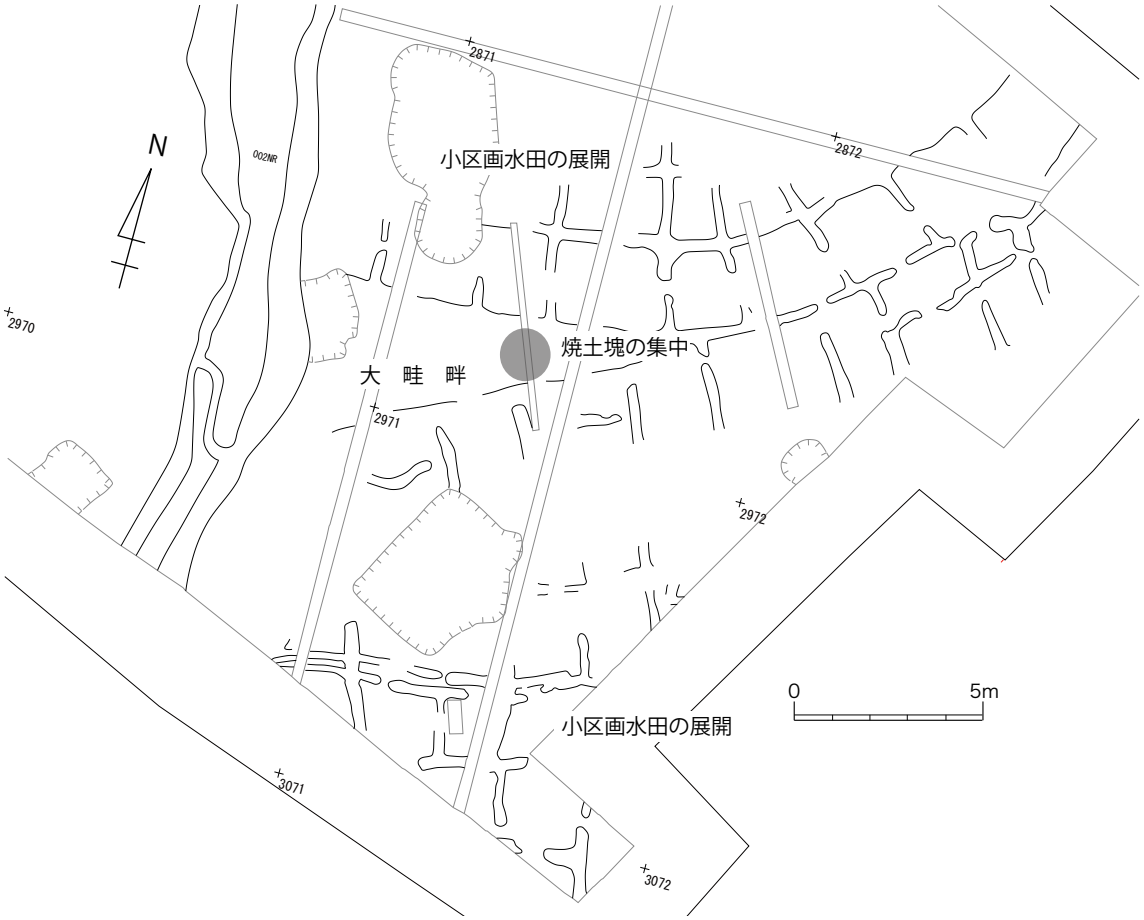


図3　Bb区水田検出状況（1/200）【左：上面、右：下面】

写真6　Bb区水田（上面）検出状況（東より）

写真7　Bb区水田（下面）検出状況（北より）



C区水田検出状況（1/200）

C区　遺跡北西端にあたる位置に設定した調査区である。段丘直下にあたる調査区西側では、Bb区西側区域同様、南北方向に走る自然流路が見つかった。自然流路東側では、北東から南西方向に、地形の傾斜に沿って小区画水田群を確認した。水田は数回営まれているようであるが、配置の変換点にあたる大畦畔状の場所に、焼土および炭化物が集中して出土した。　（川添和暁）

D区　中世以降の堆積層は、全面にわたり礫層が覆う。何度も大量の礫をともなう流水性の堆積に削平された結果と考えたい。C区寄りの部分は畑地に相当する堆積があったものの、近代以降の遺物を含む堆積が下位にあった。古代以前の水田はこれら礫層の下位にある。南側に隣接するＡｂ区の水田、西側に隣接するC区の水田と同一層序である。自然地形に沿った小区画水田が調査区西寄りに広がる。　（永井宏幸）

ま　と　め　段丘下の縁辺と神田川の氾濫原に相当する東下地遺跡の調査は、礫層の堆積を理解するのに難航した。縄文後晩期の土器石器、弥生前中期の土器石器、古代須恵器などが礫層から出土した。遺構を伴わない遺物はじつに幅広い時代を含む。

水田跡は古墳時代を中心とする小区画水田が良好に確認できた。砂礫層に覆われた水田は洪水性の堆積により削平されたところも多いが、段丘下縁辺の高低差をうまく利用した水田であった。Bb区では畦畔と水路の配置が異なる上下２面の水田を確認した。

Ａ区を中心とした13世紀代を中心とする墓壙群と柱穴群は、区画溝や井戸を伴わない。つまり中世集落跡の調査事例が屋敷地とする条件に欠ける。墓地とこれに関連する施設を想定したい。河川跡の大量投棄はこれを裏付ける。　（永井宏幸）